交流

発行日:平成21年1月1日　第3号

福島日中文化交流会　事務連絡先

〒960-0613 福島県伊達市保原町字内町21-5
Tel/Fax 024-575-2071 携帯:090-2360-3275
Email:mayumi_mihojp@yahoo.co.jp

新年のご挨拶

福島日中文化交流会
代表幹事　岩間真弓

明けましておめでとうございます。
会員の皆さまにおかれましては、清清しい新年をお迎えのことと存じます。今年が皆さまにとりまして良い年でありますよう、心からお祈り申しあげます。

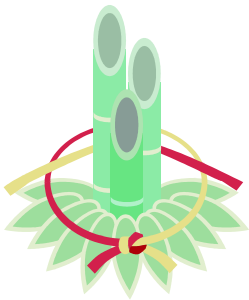
省みますと一昨年 10 月 1 日、15 年の長い間日中友好運動の一環として行ってきた中国語会話教室を母体に、気持ちが精通する方々と共に《仲良く楽しく日中文化交流を推進しよう》と当福島日中文化交流会を設立しました。あれから１年３ヶ月の歳月が過ぎ、『交流』第３号の紙上から、初めて新年のご挨拶ができますこと、嬉しく感じております。

ここに、顧問の高橋重夫さんをはじめ会員の皆さまのお力添えに対し心から感謝を申し上げます。ありがとうございます。

現在、会員数もお陰さまで発足当時の２倍、法人会員を含め７０名を目前にしております。活動としては、中国語会話教室をはじめ、花架拳教室、健康マージャン教室などの常時活動しているものや、年 3 回開催の全国統一の中国語検定試験、また昨年は、学術的な文化講演として日本中国語検定協会理事長、上野恵司先生を招いての講演会開催、少数民族の衣装紹介、花架拳、太極拳の剣を行った「結・ゆい・フェスタ」など福島市国際交流協会活動への積極的参画、更にはコラッセふくしまで開催した春節祭、市内に住む中国人と一緒に月餅を食べる中秋節交流会、通訳者派遣など、すべてにおいて充実した満足の行くものでございました。

中でも昨年 5 月 12 日発生した四川省大地震については、多くのみなさんから義援金を募りました。

ちょうど 12 日の日私は、中国語学習団の連絡で西安の陝西師範大学に電話をかけたところ、相手の董軍成先生が「地震だ！電話切ります！」というのです。その地震とは、あの 37 万人以上が負傷し、7 万人もの命を失った四川大地震でした。そのニュースを聞いた会員の方々は、誰からとなく「私達も何か力になりたい！」と義援金 94,897 円を集め寄付いたしました。その気持ちこそが、真の日中友好であり国境を越えた隣人への思いやりであると思いました。



また、昨年１２月には中国人留学生の要望があり、日本語教室を開きましたが、彼らの作文「福島の印象」を読み、彼らの喜んでいる様子を見ると会員のみなさんと一緒に活動していることが役に立っているのだなと思い、これからも然諾を重んじ、粉骨砕身の気持ちで頑張ろうと思いました。

一方、中国語学習団の中国留学も、昨年３月の武漢大学に続き、１１月の西安師範大学と２回実施しました。西安では高橋顧問の入院、団員のパスポート盗難、食あたり、腰痛激化などアクシデントが続出（詳しくは後述の＜中国語学習団のお話＞をお読み下さい）し、一時はどうなることかと危惧しました。それがなんと、これら総てが福に転じ、得がたい収穫を胸に全員一緒に帰国できたのですから、天の助けとしか言いようがありません。天が当福島日中文化交流会の活動を良しとしたと解釈し、私はこれからも設立の目的を念頭に置き、会員のみなさまと共に活動できることの喜びを感じながら、当福島日中文化交流会のやるべきことを常に考え歩を進めてまいります。

つきましては、皆さまの一層のご協力をお願い申しあげ、今年もエネルギッシュに活動することをすることをお約束し新年のご挨拶といたします。

中国のお正月・春節の迎え方

「春　聯」

中国のお正月は《春節》と言い、日本の旧正月（陰暦の１月１日）がそれで、中国の年中行事の中でも最大の行事と言われます。今年の陰暦１月元日は、昨年より１２日も早い１月２６日です。春節はこの日から７日間を言いますが、春節気分は、旧暦の１５日（元宵節）まで続くそうです。

さて、春節の迎え方の一つに、春聯と呼ばれる赤い紙を、玄関の左右に分けて貼る行事があります。これは大掃除などすっかり済ませた大晦日に、新しい年に期待するめでたい一対の言葉、例えば「歳々平安日　年々如意春」などと書いて貼るのです。そして明ければ、日本の「新年おめでとう」にあたる「新年快楽」「恭喜発財」の挨拶が飛び交います。

中国語学習団　西安へ行く

去る１１月１日、岩間代表幹事のお蔭で、彼女の第二の故郷とも言うべき西安での短期学習が実現しました。学習先は陝西師範大学で、これまた受け入れ側の董軍成先生のご尽力があってのことです。西安は奈良市と友好都市の関係にあり、城外の興慶宮公園には、１９７９年に締結５周年記念して立てられた阿倍仲麻呂の碑があります。

いま奈良では「美しい日本、はじまりの奈良」を合言葉に、２０１０年の平城遷都１３００年記念事業が大わらわ(例えば大極殿の建築など)で、平城遷都７年後の７１７年に遣唐留学生として西安(当時は長安)を訪れ、終にはその地に骨を埋めた阿倍仲麻呂(698―770)や、２００４年に墓誌が発見された井真成(699―734)を思う時、今回学習先として陝西師範大學の選定は、実に時宜にかなったものでした。

今回の西安短期留学には、中国語学習とは別に一つの計画がありました。それはこの阿倍仲麻呂碑の前で、ハーモニカ吹奏のもと「故郷」を合唱する鎮魂の儀式でした。それは１１月６日の午後、城壁観覧に先立ってかなえられました。その日天気は薄曇りでしたが、興慶宮公園は市の憩いの場所にふさわしく、日本の秋を思わせる小菊大菊が咲きほこり、市民で賑わっておりました。静かなたたずまいを見せる美しい大理石の碑の四隅に、日本から携えた銘酒「松竹梅」を捧げ、一言仲麻呂について話した後、「紅葉」を吹奏し「故郷」を合唱しました。

私は杉木立の前の碑を見上げながら「三笠の山に出し月かも」と詠うも帰国を果たせなかった仲麻呂の心境を思い目頭が熱くなりました。最後に車椅子で参加の安原さんが、笛で「みかんの花咲く丘」を奏でられたことを付記します。

（佐藤満）

――満話乱書――

昭和１６年の元日

拙文を＜満話乱書＞とした。「満の話乱れ書き」と読む。音読みにすれば「寄らんしょ、来らんしょ」に続く「回らんしょ」である。私はこの言葉が好きだ。日当たりのよい縁側に座って針仕事の老婆が、通りを行く人に声を掛ける。

「回らんしょ、寄って行がんしょ」

何とのどかな情景ではないか。作家遠藤周作の著書に＜狐狸庵閑話＞なるエッセーがあるが、これは「こりゃ―、いかんわ」からの命名だそうだから、なかなかうまく考えたものである。

×

年が明けて昔流の数えでいうと、我輩は７８歳に相成った。これは父の３倍、養父の２倍、お袋の１と３分の１倍に当たる。自分でも健康で長生きしたものと思うが、一休禅師の「元日は冥途の旅の一里塚　めでたくもあり　目出度くもなし」の歌にあるように、意に違う来し方を考えると、一概に喜べたものでもなく、めでたくもあり目出度くもなしだ。

さて、最近何かにつけ昔のことが思い出されてならない。これは老いもあろうが、戦前と比べ荒れた世相も原因ではないかと思う。それで新年でもあり、題を「昭和１６年の元日」とした。

当時私は小学２年生で、神奈川県横須賀市に住んでいた。前年の昭和１５年は、紀元２６００年の祝賀行事が国を挙げて行なわれた年で、「お父さん」と呼んでいた養父は、軍属として戦火の中国＜漢口＞に従軍していた。

大晦日（当時は年取りと言った）の夜、母が「明日の朝は暗いうちに起きて、お父さんのご無事をお祈りに行くんだから、早く寝なさい」と言う。わが家にはラジオも無かったし、言われるままに妹たちと床に入ったが、母は正月の用意で、寒い台所に遅くまで居たようだ。これが悪かったのだろう。

元日の朝、起されて眼が覚めた私に母が言った。「風をひいたようで熱もあり頭も痛い。とてもお参りに行けそうもないから、満、一人でお参りして来てちょうだい。いいね？　十歳（とお）になったんだから（実際はまだ八歳）、ちゃーんと拝んで来れるね？」

私はよそ行きの紺のサージの服に、ボックス型のオーバーを着、編み上げの靴を履いて家を出た。外はまだ暗かったが、寒くはなかった。朝夕下駄の音を響かせて行き来する工員であふれる通りは、ぽつんぽつんと裸電球に照らされ静まり返っていた。

初もうでの氏神様は子之神神社と言って、家から５００メートル程の距離である。通りから境内に上がるきざはしは暗く、初もうでの人影はまばらだった。私は電球が下がっている拝殿の前に立つと、母から預かったお賽銭を上げ、養父が神棚の前で唱えていた祝詞（のりと）を口の中で唱えながら、戦地の＜お父さん＞の武運長久を祈ったのだった。

「カミノヒラキタマエル　スメラミクニノ　イシズエヲカタメントシテ　ミチノイクサノジントウニタテル　ドウシイチドウハ　ミヲキヨメ　タマシイヲシズメ　カシコミカシコミテ　オオミカミノミマエニマオサク――」

今では途中までしか言えないが、教育勅語とこの祝詞（のりと）は、その頃全部空で言えた。元日というのに母が風邪で寝込んだことで滅入っていた私だったが、参拝し終えると晴れ晴れとした爽快な気分になったのだった。

時は流れ、あの日から６８年が経つ――初もうでから帰ると七輪に火をおこし、妹たちに餅を食べさせて、学校の四方拝の式に出たのだが、今でも火鉢に手をかざし、餅が焼けるのを見ていた妹たちの姿が浮かんで来る。近頃とみにあの頃の自分、つましかった家庭が、いとおしく思われてならない。

中国・西安の印象

中国語学習団に参加された方々に、感想文をお願いしましたところ、多くの方から原稿が寄せられましたので、次に掲載いたします。有難うございました。なお、勝手ながら［　］に編集者のコメントを加えましたので、ご了承ください。(佐藤　写真も)

再び西安に来て

石川孝彦

いろいろありましたが、［ありましたね。団長入院やパスポートくん行方不明など、だけど――］終り良ければすべて良しで、良い思い出だけが残っています。一昨年妻と西安に来ましたので２回目ですが、その時行けなかった小雁塔に登れたこと、書院門街での買物(印鑑)などが、特に印象に残りました。

写真は書院門　手前は医師の山尾先生。

「金餅」に出会う

川島一雄

「金餅」という名称のあるゴールドの金貨の山を、陝西歴史博物館で目の当たりにし、写真に撮ってきました。この「金餅」が、私を「金持ち」にしてくれることを願っています。

岩間さんの毎日の行動に、観音様を感じました。

空気と　テレビアニメと　料理と

高坂愛里（高校生）

中国に着いた時はあまり気になりませんでしたが、だんだん空気の悪さに気付きました。福島とか超空気キレイです。澄んでます。ある意味、発見です。

その他衝撃を受けたのは、フリ目のドラえもん、メタボなキティーちゃん、ウルトラマンとスパイダーマン夢の共演等です。絶対著作権を無視してます。

そして料理は、油と酢と唐辛子中心で、味が分からなくなる位辛いものもありましたが、おいしかったです。個人的に＜おかゆ＞が気に入ったかも。

［それに薄味の＜きのこのスープ＞も旨かったね］

城壁から北の鐘楼を望む。午後３時前というのに遠くは霞んでいる。西からの黄塵と車の排ガスのためか？

面白いこと

福嶋冨士雄

今回の旅行で一番なやんだのが、お土産物を何にすべきかであった。とどのつまりが甘栗を２公斤(1kg)を購入した。

上海の国際空港ではチョコレートのつめ合わせを買った。帰国後チョコレートを点検したら、製造年月が 06 年 06 月であった。ビックリしてまず我が家で毒見をし、安全衛生を確かめてから他家にくばりました。「中国とは面白い所だなあ！！」と、あらためて痛感しました。

[学校で買った小箱が八つの＜長安八景＞というお菓子、香煎の粉を固めたような塊４個が、小箱の下の方に――これには驚きました。]

何日再訪西安

安原　毅

西安は永いあこがれの心の京でした。この度念願がかなって訪れた長安の都は『日本文化の一源流』たる格式とたたずまいが感じられ、満足できるものでした。

心ならずも腰痛のため、思いどおりに自在に行動はできませんでしたが、中国の方の心のやさしさと、同行の皆様の温かい心遣いを『身障者』となって、一層感じつつ帰国いたしました。できれば再度、書院門や小雁塔に行ってみたいと思います。

小雁塔　東南から望む

中国語学習団に参加して

山尾　展正

私にとって、今回の参加は色々な意味で大切な経験になりました。

まず、何と言ってもこの日中文化交流会のメンバーの一員になれてとてもよかった、と感じたことです。私は、会員になって日も浅いこともありますが、中国語のクラスには殆どいつも遅刻するため、会員の皆さんとの面識が殆どありませんでした。

今回の学習団への参加も、会の皆さんが努力して積み上げた計画に、おいしいところだけいただくかのように参加し、心苦しく感じていました。

今回の参加は本当に貴重な体験でしたが、それだけに高橋さんを初め参加された会員の方々とは勿論、参加されなかった会員の皆さんとも帰国後の参加報告を通して、打ち解けた交流ができるようになったことは、私にとってとても有り難いことでした。

楽しかった！　また参加したい！

大須賀ミチ子

学習団の８日間は、中国語の勉強は勿論ですが、ハプニング続出。楽しみながら、いろんな学びを体験することができました。これには、関係者のご尽力に、ただ感謝のみです。

「ご苦労さまでした！　楽しかったです！　また参加させて下さい！」

教室風景、可愛い先生と

清真寺でハイポーズ

兵馬俑２号坑入口にて

貴重なる体験

５回目の中国語学習

矢部良子

北京大学、上海外国語大学、広東外貿外語大学、武漢大学、陝西師範大学と 5 回目の参加となりました。元気で五感をフルに使って交流するのを楽しみに、心も軽く 15 名の仲間に入れていただきました。1 日～3 日夕方までは、実に順調で楽しく過ごすことができました。

ところが、徳発長で名物の餃子を堪能した深夜に体調が急変しました。60 ウン年も頑張ってきた消化器官がギブアップしたようです。『明日になれば』と思いながら様子を見てましたが、4 日朝になっても回復せず、授業は休み、持参した薬を飲み安静にしていましたが、おさまらず、5 日（水）も同じでした。こんな筈ではなかったのですが、“ 苦 ”“ 痛 ” と “ 悪心 ” に耐えながら安静にしている中でＤｒ山尾よりいただいた薬と岩間先生の常備薬をわけていただいたりして、ようやく回復できました。

6 日（木）には、授業にでたいと思う程になりました。ところが歩き出したら地面が迫りくる感じの状態でやっぱり休まざるを得ないかな？と弱気になった時に、岩間先生より「（ためらわず）観念しましょう！」と有無を言わせないタイミングで車椅子に乗せていただきました。

車椅子の私、興慶宮公園入口にて

数秒後に私の両眼からは突然の涙が湧いて流れ出し止らなくなってしまいました。幼少時より「人前で泣くな」と躾けられたわたしでも

全く制御不能の感激でした。

短い言葉なのに込められた暖かく

親切な直刺 zhícì（立剣で指す剣法）

されました。

大学の移動でも多くの方々がかわるがわる車椅子を押して下さいました。午後の見学には、迷惑をかけないよう宿舎で休養するつもりでしたが、皆さんの好意に甘えて参加させていただきました。

阿部仲麻呂の碑の前で佐藤満さんの献酒とハーモニカ演奏にはまたまた心の底から熱いものが込みあげてくるのを禁じ得ませんでした。演奏には、合わせて皆で「ふるさと」「月の砂漠」を歌いました。共に笑い、喜び、感動し、時には涙することも共有できる仲間が居ると言うことは、何と幸せなことでしょうか。

今回、私が体調をくずしたことは、個人的には一大事でしたが学習団としては、事の重大さからみて 4 番めか 5 番め位だろうと思います。兎に角トラブル（アクシデント）続出でしたが、全てが的確でスピーディーに解決されてきたことは、真に驚異的なものでした。その理由は、大学側の協力で董老師が労を惜しまず日夜の別なく必要な事、考えられる事のすべてに全力を尽くして対応してくださったと聞きました。団員一人一人の心がこれらの事の支えになったからだとつくづく思いました。

今回の短期留学で私は、物やお金でもなく、お金では買えない貴重なものをおみやげに持ち帰ることができました。学習団の皆さまには、心から感謝致しております。これからも学習団には、参加していきたいと思いますが、中国語の進歩は、少しだけ望み、心の琴線に触れるような交流ができればいいなぁと思っております。

中国医療事情
――西安の緊急入院体験から

髙橋　重夫

陝西師範大学学習団 15 名は、古都西安で 7 泊 8 日の日程を終え、11 月 8 日全員無事帰国しました。

午前はレベルごとに分かれ各国留学生に混じって中国語学習 2 コマ、午後からは観光などの自由時間、学びとお楽しみと、程よいバランスの 1 週間でしたが、その間実はハプニングが次から次へで、岩間さんはじめ団員皆さんをハラハラさせ通し、全員そろって成田の土を踏めたのは奇跡的と言ってよいくらいでした。

ハプニングの筆頭は恥ずかしい話ですが、団長の私が西安で緊急入院というお粗末です。緊急事態の中でとりわけ岩間さん、同行の医師山尾展正先生、陝西師範大学国際漢学院の董老師お三方には、親身で冷静な処置をしていただき、言葉に尽くせないお世話になりました。

また団員皆さんはもちろん、福島で留守居役だった渡部千佳子さんまで、旅行参加のご主人と電話連絡をとり、山尾先生と在福の私の主治医、家内とが電話で情報をやりとり出来るように応援していただきました。この会報をお借りして心からのお詫びとお礼を申し上げます。有難うございました。

さて、その他のハプニングや大学の学習と楽しかった見学については他の方の発表にお譲りし、中国の病院で老百姓と一緒に 3 泊 4 日の入院をした貴重な体験を少々ご報告いたします。

×

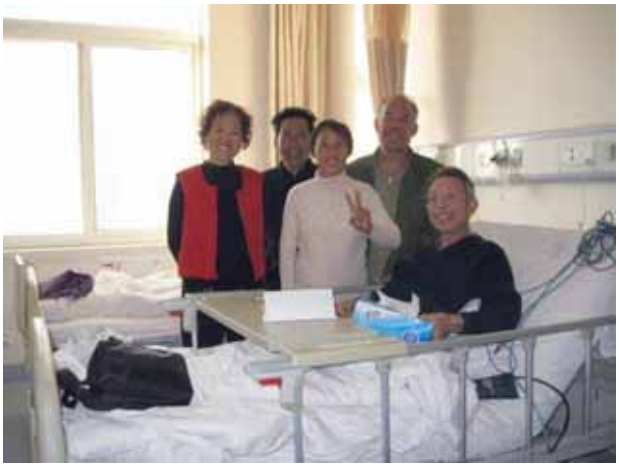
西安交通大学医学院第 1 付属病院、中国西部最大の医療センターです。広い体育館のような外来棟は、患者と付添い人で大層混み合っていました。その中を縫うようにして師範大の董老師や大学の運転手君が、ぐったりした車椅子の私をやれ診察、やれレントゲン、やれ心電図室へと運んでくれました。順番待ちを飛ばして強引に（要領よく?）割り込んで行くのも、中国式“お上み”のやり方かと、有難くもあり、申しわけなくもあり複雑な心境でした。

最初診察を受ける前にまず診察申し込み料を会計窓口で先払います。その領収書を提出して初めて診療科目の診察順番を待ちます。何事もお金が先です。

同様にレントゲン、心電図など医師の処置指令ごとにまず前金を払い、その領収書を見せて処置を受けます。レントゲン写真や心電図などの医療データは、担当医が見たあとで患者が受け取り、自分で保管していました。これは一面合理的です。しかし病院側はカルテを保存するのでしょうか。それともそれっきりでなんの記録も残さないのでしょうか。

中国語教科書などによく…

医生:“给你开一个药方吧。”(薬の処方箋をあげよう)と言うのが出ますが、この語感は病院側に記録は残さず、その場限りの医療ととれますね。



西安交通大学第 1 付属病院、
同室の患者たち、右端が髙橋

入院棟は外来とは様変わり、20 階建ての近代ビル、すべて清潔、病室やナースステーションなど外見は日本の病院と同レベルのようです。

私は肺炎の診断でしたから」呼吸器内科重症区の４人部屋、早速酸素吸入、抗生物質点滴、心電図などの監視モニターつきで絶対安静となりました。

その段階ではじめて分かったのですが、中国の病院は（或いはこの病院のやり方か?）医療はするが、患者の食事ほか身の回りのことは、付添い人が 24 時間看護するのだと。いわば“不完全看護です。”そういわれれば周囲は皆家族が看護しています。

やむなく第１夜は岩間さんが、私のベッドの足元にパイプ椅子を並べて仮眠しながら私を看取ってくれました。申し訳ない、有難う…その姿は呼吸困難で朦朧としたわたしの眼に、まるで慈母観音のよう

に映ったものです。
私の看護のために学習団のスケジュールを犠牲には出来ません。やむなく私も家内を福島から呼び寄せることにしました。家内がはるばる病院に駆け付けたのはほぼ 24 時間後の入院第 2 夜、この日は同行の山尾先生が午後から夜にかけての自由観光を犠牲にして、付添っていただきました。

同室の老百姓は、西安周辺 50~60 キロに住む農民です。年齢 40~60 歳、みな友好的で親切にいろんなことを手伝ったり、教えてくれたりします。

ちょっと閉口したのは好奇心の強いのと、声高な騒がしさです。絶対安静ですから大小ともにベッドで済まさねばなりません。3 日目ようやく大を催して力み始めた時でさえ、まだかまだかと言わんばかりに観察に来るのがいます。“ニーハオトイレ”に慣れっこな彼らですから、一緒に力んで手伝おうとでも言うのでしょうか。　また手帳に何かメモしようとすれば、直ぐまた覗きに…。

病室ではしばしば声高な雑談が始まります。

静かにして居たいこちらの思惑なぞ一切関係なし。前後左右、患者も付添いも交えて負けじとわめくのです。全く取り留めない話題のようですが、彼らは真剣に少しも妥協せずわめき合います。

独り無言安静の私の頭上を、言葉のロケットが唸りを挙げて飛び交うのです、そのうるさいこと!

“少声点儿！”“安静点儿！”“别吵闹!”と怒鳴ってやりたいが、後の気まずさを思うと、やむなく辛抱々々。

×

外来診療を含めて支払った 3 泊 4 日の総入院費約 66,000 日本円。これはほぼ旅行保険で還付されることになりましたが、家内の救援渡航費約 12 万円は保険契約時に適用を削ったのでもちろんダメです。

それにしても老百姓たちには医療保険はなさそうで、1 日約 1,000 元の費用は如何ばかり重負担であることか、福祉とプライバシー、この日中格差はまだまだ大きいように思いました。

最後にもう一度、皆様に大変ご迷惑をおかけし申しわけありませんでした。また親身のお世話を有難うございました。　　（２０．１１．２０記）

華清池にて

非常感謝！！

高橋まさ子
（高橋重夫顧問夫人）

皆さんに大変御迷惑をおかけしましたが、おかげ様でみんなと一緒に帰ることが出来、ありがとうございました。

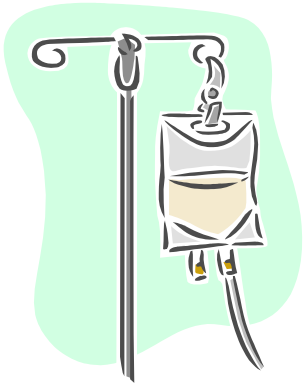
西安のトルコ行進曲

山尾　展正

向いのナースステーションからトルコ行進曲が聞こえてきた。　タラララン，タラララン、タラララタララララン、ラタ、タラタタ、タラタタ、タラタタタン、ラタ･･･。

するとベッドの枕もとのスピーカーから「SHAO DENG YI XIA」と看護師の声がつっけんどんに部屋に響き、まもなく一人の看護師が部屋に入ってきた。そして、高橋さんのベッドの傍らに来ると、語気鋭く私に向かって何やら怒鳴りだした。「･･XIAO BIAN･････, HAO　BU　HAO？」顔はわからないが、マスク越しの目がはっきりと怒っているのがわかる。

黙っている私に、再度　「･･XIAO BIAN･････, HAO　BU　HAO？」　と、さっきとおそらく同じことを畳み掛けるように言いながら、私に近づいてきた。彼女の話している言葉の殆どは　TING　BU DONGだが、実は、内容については良くわかっていた。勿論、高橋さんにはすべて聞き取れているのだが、わざと目を閉じて寝た振りをしてもらっている。彼女の剣幕に押されて、私はたまらず、「HAO。　DUIBUQI。」と、小さくなって返事をした。　看護師は、高橋さんの胸に心電図のモニターをつけなおすと、憮然とした表情で部屋を出て行った。実は、これより少し前、高橋さんと私は、二人で相談してベッドから抜け出し、お手洗いまで脱走する計画を立てていた。　高橋さんは、心無くも、点滴に繋がれ、胸は心電図計に繋がれ、鼻には酸素チューブが繋がれ、手は酸素飽和度のモニターに繋がれて横たわっていた。しかし、入院当初から見ると回復は順調であり、部屋の中にある数メートル先のお手洗いまでは、酸素無しでも移動できるほどになっていた。夕食を食べる間、酸素を鼻からはずしてみたが、唇の色にチアノーゼは見られず、息苦しさも見られなかった。　夕食が済むと寝支度をしなくてはならないが、当初、ベッド上で予定していた、「寝る前の歯磨きとお小水」は取り止め、手洗いで行う事に変更した。部屋は他に４人の患者さんとその付き添いが居る。　他人に気兼ねなく自分でやりたい、という高橋さんの希望を受け入れ、私は脱走に協力することに決めた。問題は、ナースや病院スタッフである。お手洗いに行くためには、酸素と種々のモニターをはずし、点滴を持って移動しなくてはならない。彼らに相談しても受け入れてくれそうにない。　ベッド上でやれば良い、と一蹴されるに決まっていた。　なぜなら、万一を考える病院としては許可しないだろうし、それに、個人の尊厳を重要と考える医療がここで展開されているとは思えなかった。（日本でさえ尊厳を軽んじている医療施設がまだまだ多い。）従って、わざわざお手洗いに移動して歯磨きとお小水をやることの重要性を、彼らが理解してくれるとは思えなかった。　しかし、脱走するには、まず、酸素チューブをはずし、胸と手に繋がれている心電図と酸素飽和度のモニターをはずさなければならない。

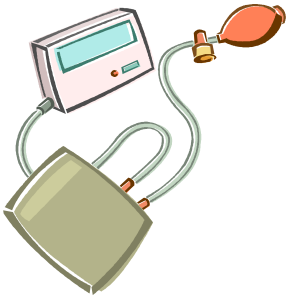


そんなことをすれば、すぐにナースステーションのアラームが鳴り出し、看護師が飛んでくるだろう。

ならばどうするか？私が身代わりになって自分の胸と手にモニターをつければアラームが鳴ることは無い。そうすれば、その間に高橋さんはお手洗いまで行くことができる、と考えてみたが、このようなスパイ大作戦もどきの作戦を実行するのはやはりためらわれた。　見つかった時、何とも言い訳がつかないし、それに、何もこそこそする必要はない。

そこで私は、自分が医者で有ることを利用し、あくまでも医師である私の判断で移動を許可しているシチュエーションを考えた。様子のわからない外国の医師が、中国の病院のルールを無視して勝手に行動してしまうという脚本である。　早速、高橋さん

の胸と手からモニターをはずし、酸素チューブをはずしてお手洗いまでの移動を手伝うと、案の定ナースステーションのアラームが鳴り出した。ナース達が、廊下を隔てドア越しに私と高橋さんを見ながら何やら話している。しかし、私達が何食わぬ顔で落ち着いて行動しているのを見ると、じっと見ているだけで、それ以上私たちの行動を止めようとはしなかった。無事用便を済ましし、ベッドに戻るとすぐに高橋さんの鼻に酸素チューブをつないだ。肺に酸素を流し込むと、さすがに私はホット胸をなでおろした。高橋さんも、さすがに疲れたのか目を閉じて横になった。　最後に心電図モニターをそのまま繋ぎ、全てを元に戻して知らぬ顔をしていようかと思ったが、そこまで看護師の方々に何も言わないでいるのはさすがにどうかと思われ、心電図だけはナースコールを押してスタッフを呼ぶことにした。そこで、冒頭のトルコ行進曲である。飛んできた当直の看護師が怒るのは無理も無い。彼女にして見たら、酸素をはずして移動した為何か事が起これば、自分の責任を問われる事は必至である。主犯の外国の医師が何様であろうとも、その医師に文句の一つや二つ言いたくもなるであろう。一方、私の方も言葉ができたら、おそらく人間の尊厳が大事で有ることを主張して涛涛と言い訳をしただろう。　そうしたら、お互いの立場の主張が対立し、言い争って気まずいことになったと思う。あらかじめ岩間先生からは、くれぐれも中国の医療に不満を表明しないよう釘を刺されていた。　この場合は　言葉ができないことが幸いした。私は心の中に未消化の不満を抱えながらも沈黙のままナースを見送った。その後しばらくして高橋さんの点滴が終わり、点滴の交換のため再度ナースコールを押す事になった。　タララララン、タララランランタララタララララン、ラタ、タララララ、タララララ、タラタタタン、ラタタタタラララン、ラタ・・・・と、再びトルコ行進曲がナースセンターから鳴り響いた。先程と同じ看護師が来て、点滴を交換し終わると、なんと私に向かって頭を下げ、両手を胸に組んで、「ＱＩＮＧ・・・・・・」と、丁寧な態度で言葉を残し部屋を出て行った。今度もＴＩＮＧ　ＢＵ　ＤＯＮＧではあったが、私には、「どうか自分の立場を理解し、今後何か有れば自分で行動せず、遠慮なく相談して欲しい。お願いします。」と、言っている様に聞こえた。　彼女も、私が医師であるのに言い訳をしないことで、　私の気持をわかってくれたのだろう。　マスク越しの彼女の目はやさしく感じられた。トルコ行進曲を聞くたび、あの看護師の二つの目をこれからも思い出すだろう。　色々な経験と思い出を残した西安の病院だった。高橋さんの回復を心からお慶び申し上げます。



なお、この文章は、高橋さんの了承を頂いて書きました。

『西遊記』第 15 話から始まった物語

―中国語学習団のお話―

岩間真弓

三蔵法師である高橋重夫さんとその弟子たち 15 人の一行が取経の旅、天竺へ向かう途中、蛇盤山鷹愁澗（だばんさんおうしゆうかん）に辿り着いたとき、水の中から竜の安原毅さんが現れ、三蔵法師である高橋重夫さんの馬を食べてしまった。というところから今回の話が始まりました。

（華清池の楊貴妃の像の前で）

11 月 1 日から 8 日まで 8 日間、唐僧高橋はじめ、弟子たちは、いろいろな妖術にかかり、倒れたものあり、盗賊にあったものあり、いやはや世にも不思議な体験をしてきました。中国には、本当に仙人や妖怪、菩薩の変化、お釈迦様がいるものなんですね。

8 日間の日程では、二日目に、西安で有名な兵馬俑、華清池を見て、三日目からは、午前中に中国語の修行、午後から西安の名所旧跡を訪ね托鉢をする予定でした。

しかし、二日目に、竜の安原毅さんが、唐僧高橋の馬を食べてしまい、罰を受け腰が痛くて歩けなくなり、三日目には、唐僧高橋が、馬がなかったので歩いてくたびれを起こし、具合が悪くなり肺炎を起こして入院することになりました。しかし、お伴をしていた猪八戒の山尾展正さん（医師）が補助呼吸、小便器、などの妖術を使い唐僧高橋の病気は除々に良くなっていきました。そして極めつけは、唐僧高橋の愛人（奥様）が遠路はるばる何千里の道を一人

（みんなで見学した兵馬俑）

で訪ねてきたのでした。その可愛らしい愛人の顔を見た唐僧高橋は、点滴よりも薬よりも病気に効きすっかりと良くなってしまったのです。

また、竜の安原毅さんは、馬に変身して車椅子という道具を使い弟子として唐僧高橋にお供をすることになります。

それから、またもや弟子の川口裕海さんが、盗賊に会うという悲劇に見舞われます。弟子の川口裕海さんは、関所に必要な手形（パスポート）とお金を盗賊に盗まれてしまったのです。なんていうことでしょう！その手形がなければ、国に戻っては来られません。他の弟子達にも家宅捜索をされたにも関わらず、とうとう手形は出てきませんでした。

仕方ないので孫悟空である私（自分で言ってすみません）は、お釈迦様である陝西師範大学の留学生弁公室の董軍成老師に相談し、あらゆる技を手ほどきしていただきました。お釈迦様の董軍成老師は、常日頃、巷に盗賊が出て手形を盗まれることなど日常茶飯事、どんな妖怪にも立ち向かいどんなことでも解決できるすばらしい人物、この方がいなければ、いろいろな妖怪に太刀打ちできませんでした。

孫悟空である私は、お釈迦様の董軍成老師の教えをしっかりと聞き、如意棒を振り回し、弟子の川口裕海さんを金斗雲に乗せて北京の関所手形発行所（日本大使館）へ飛ばしてやりました。北京には、孫悟空である私の友猿が待っていてくれて全てを手配してくれました。本当にありがたい！持つべきものは友猿だ！

こんなことしているところに他の男の弟子達は、中国語の修行をしている時に老師という美しい 3 人の女に心を奪われてしまいました。それは、それは美しく可愛い老師 3 人でした。しかし、それは、すけべ心をたしなめるためにした菩薩の変化の仕業だったのです。何も知らずに男の弟子達は、まんまと騙されてしましました。

可愛い先生

素敵な先生

女の弟子の矢部良子さんは、妖怪に怪しい毒をもられてしまいました。妖怪は、羊の肉と言いながら実は、メラミン入りの毒餃子を食べさせてしまったのかも知れません。しかし、日頃、太極拳で体を鍛え、妖術を学んでいるので少しぐらいの毒もすぐ消化！すぐに復活しました。なんとたくましいことでしょう。馬の車椅子に乗り軽快に走る、走る、走る。

とにかく、いろいろなことがありました。でも、今思うととても懐かしく、楽しい思い出ばかりです。そして、董軍成先生や運転手の王さんが日夜を問わず献身的に尽くしてくださったこと今でも忘れるができません。それから、阿部仲麻呂の碑の前で、佐藤満さんのハーモニカの演奏で『ふるさと』を歌ったことも忘れません。大変感動しました。

眼鏡の先生

（写真：董軍成老師、冯先生、山尾先生、運転手さんにはお世話に成りました）

福嶋さん、団長の代わりに団をまとめていただいてありがとうございました。大須賀ミチ子さん、美帆を親身に面倒見てくださってありがとうございました。愛里さん、団を明るくしてくださってありがとうございました。

そして、本当に全員のみなさま方に感謝を申し上げたいと思います。こころからありがとうございました。

平成２０年度忘年会

つり橋の信夫温泉で開く

当交流会は平成２０年度の忘年会を、雪がうっすらと積もった１２月７日、**信夫温泉のんびり館**で開きました。

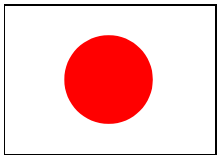
参加者１７名、温泉に着くや皆さんは当館目玉の露天風呂や「開運の湯」へと急ぎ足。お湯の中から眺めた唱歌「雪」の＜枯れ木残らず花が咲く＞さながらの雪景色は格別で、雪見風呂を楽しみました。

宴会もまた良かった。東西に分かれての「何人立てる？」や、トイレットペーパーによる運搬競争、

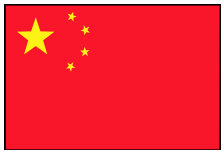
（勝ったのは猪俣さんの東チームで、賞品は数個のサッカーボールなど沢山）お話作り、更に山尾先生の魔法の写真や、ハーモニカ、フルートの演奏にカラオケと盛り沢山で、時間が経つのも忘れました。

魔法の写真の山尾先生

岩間さんのフルート



お知らせ



いつも福島日中文化交流会へのご支持とご協力感謝申し上げます。

会費の振込は、下記へよろしくお願いいたします。

会費納入について
(1)　郵便局振込みの場合（お近くの郵便局で）
02220-7-105525　福島日中文化交流会
(2)　銀行振り込みの場合
振　込　先：普通預金　東邦銀行保原支店
口座番号：733649
名　義　人：福島日中文化交流会
代表幹事　岩間真弓
住　　所：〒960-0613
伊達市保原町字内町 21-5
(3)　会費について
法人会員　10,000 円
個人会員　3,000 円

中国語会話教室からお知らせ

◎中国語会話教室第 34期募集！

日時：平成 21年4月～平成 21 年9月
（時間は各級による）
場所：福島市中央学習センター
内容：入門・初級・中級
費用：一ヶ月 3,000×6 ヶ月＝18,000 円
講師：李淑薇・岩間真弓

◎第 66回中国語検定試験開催

日時：平成21年 3 月 22 日（日）
平成 21 年 6 月 28 日（日）
平成 21 年 11 月 28 日（日）
場所：福島テルサ
内容：準 4 級・4 級・3 級・2 級・準 1 級・1級

「当面の行事のお知らせ」

1　花架拳教室

日時：毎月第二日曜日（都合により変更もある）
場所：福島市中央学習センター
内容：護身術である花架拳を演舞する
講師：日本花架拳学会　飯田加寿子

2　健康マージャン教室

日時：毎月第二日曜日（都合により変更もある）
場所：福島市中央学習センター
費用：1 年分　6,000 円（500 円×入会月から）
内容：吸わない・飲まない・賭けない健康なマージャンを楽しく行なう

3　日本語教室講師募集！

日時：毎週木曜日 16：00～17：30
場所：福島市中央学習センター
内容：中国人に日本語を教える
※　講師料は、お支払いできません。教科書各自負担。

4　日中文化交流祭“春節祭”

日時：平成 21 年 1 月 25 日（日）10：00～14：00
場所：福島市中央学習センター　調理室
内容：中国人は、餃子作り
日本人は、お餅作り

≪編集後記≫

今回は西安学習団の記事、写真を多く寄せて頂きありがとうございます。とても有意義で、ハプニング続出の思い出深い学習団内容の会報が出来ましたことを皆様に感謝申し上げます。

今後も皆様から多くの情報のご提供をお願いします。今年も良い年で有りますよう祈念します。

（編集担当　佐藤満、加藤一朗）